

若手研究者が語り合う「難民研究の面白さと難しさ」 ～学部生・大学院生への第一歩～

2022 年 9 月 27 日（火） オンライン開催

主催：難民研究フォーラム

登壇者

■パネリスト

片雪蘭 奈良大学 講師（文化人類学、南アジア地域研究）

植村充 東京大学博士後期課程/法政大学 兼任講師（EU 研究、移民・難民研究・フランス政治）

小俣直彦 オックスフォード大学国際開発学部難民研究センター 准教授（文化人類学）

山田光樹 難民研究フォーラム事務局員

■モデレーター

松本悟 法政大学 教授（開発研究）

【目次】

パネリストの自己紹介：これまでの難民研究、これからの研究	1
「面白さ」という言葉	4
難民研究者と学生とのギャップ：難民問題をどう伝えるのか	4
難民問題への「関心」から「研究」へのブリッジ：どのような調査・研究ができるか	6
難民研究の「学際性」とはなにか	9
難民に会わず難民研究を行えるのか	10
研究資金を得るための「面白さ」を追求していないか？	11
難民研究者としての柱	12
難民研究だからこそ見えるもの	13
おわりに：難民研究者が伝えていくこと	14

パネリストの自己紹介：これまでの難民研究、これからの研究

ーパネリストの皆さん、ご自身の関心や研究についてご紹介をお願いします。

片 私は韓国の出身で、インドに住むチベット難民について研究しています。2009 年から大阪大学で文化人類学を専攻しました。2019 年に博士学位を取得した後は、国立民族博物館での勤務と関西学院大学先端社会研究所の研究員を経て、現在の奈良大学に至っています。私は、2007 年からチベットと関

わっています。本格的にチベット難民について研究し始めたのが、2009 年からです。特に、2015 年からはインドのダラムサラの中でもチベット難民が多く暮らしているマクロードガンジ (McLeod Ganj) という小さな町で調査をしました。この時の成果は本として出版されています。

私は高校の時からチベットに興味がありました。難民に興味があるというより、まずチベットに興味がありました。ブラットピット主演の「Seven Years in Tibet」という映画を観たりして、かなりチベットに憧れを抱いていました。大学生になった時に北京からチベットのラサまでの列車開通により、1 ヶ月間旅行をしました。旅行を終え、帰国後もチベットが忘れられなかったのも、インターネットでソウル市内にいるチベット人を検索しました。少人数ではありますが、チベット人コミュニティがあることを知り、そこに参加し始めました。その時、出会ったチベット人の友人たちが難民出身であると知り、衝撃を受けました。中には結婚して韓国にきた人もいれば、留学生もいて、宗教ビザなどで来たお坊さんたちもいましたが、インドやネパールに難民としていた人たちが韓国にきたという事実にかなりショックを受けました。この人たちについて勉強したいという気持ちになったのが、難民研究を始めたきっかけです。

1 年後にインドのチベット難民が暮らしているところにも訪ねた方がいいとチベットの友人に言われたことを受けて、実際に行きました。想像していた難民居住地・難民像とかけ離れた姿にかなり衝撃を受けました。2009 年から日本でチベット難民について研究を始めることを決めました。

修士の頃は、チベット難民に関する先行研究を全部読んで整理することで精一杯でしたが、インドで再構築されたチベットの文化が主流の研究テーマでした。1959 年にチベット難民が発生したのですが、当時、世界的にも関心が寄せられていましたし、有名なダライラマという指導者がいて、亡命政府もありました。指導者がいることでシステムティックにチベットの社会や文化が再建されていくという考え方、文化構築論に（既存研究は）偏っており、どのように生計を立てているのか見えづらいということを経験しました。そこで、博士課程からは、特にチベット難民の生計戦略について研究を始めました。

現在は、コロナの影響で長い間、インドに行けていない状況でした。友人たちの多くも海外に移住してしまいました。その影響もあって、現在はインドのチベット人コミュニティと海外のチベット人コミュニティの送金の流れを調査している最中です。同時進行で、難民の移動と身分証、時間の関係性に注目して、モビリティと身分証を得るために待機する時間との関係を研究しています。コロナの影響で、国境を超えることの意味やパスポートとは何かについて研究しています。

植村 私は、大学院で研究をしている傍ら、法政大学人間環境学部において、主に平和学と人間の安全保障論の講義を担当しています。私が難民研究を志したきっかけは、人の移動に興味を抱いたからです。大学 2 年生の頃に、フランスで移民であろうという人にお金を取られるという経験をしました。日本社会ではあまり感じない移民を受け入れる社会の複雑さを感じました。その時から、人の移動にまつわる問題に興味を持ち、研究を進めてきました。学部時代は上智大学の法学部におり、EU の移民研究をされている先生の下で、家族移民や経済的理由に基づく人の移動を分析対象として研究してきました。修士課程の在籍時に、いわゆる「2015 年欧州難民危機」が発生し、連日ニュースが流れる中で強制的な理由に基づく「難民」に対する興味も生まれました。

現在は、欧州統合にともなう庇護申請者政策領域における共通政策の策定と、加盟国の中でフランスを対象に国内政策における（共通政策への）対応を研究しております。特に、家族移民・経済移民・庇護申請者・非正規滞在者への処遇などの各政策領域の包括的な分析を行っております。研究方法は、主

に資料を用いて文献調査を行っています。例えば、EU 機関、政府機関発行文書、各種裁判所判例、NGO・国際機関資料を用いて文献調査を行っております。

面白かったことは、EU 研究の視座から難民問題にアプローチすることで、従来、主権国家の核心的政策領域であった人の移動をめぐる政策が欧州統合によって変容しているダイナミズムを感じられたことです。苦労したことは、政策の多層性・複雑性がその改定の速さと相まって、理解するのに相当の労力があることです。国際関係レベルでは政策が複雑で、運営面でも相当な労力がかかるのが、難民研究をする上で注意した方が良いポイントだと思っています。

小俣 私はオックスフォード大学に務めております。私は、研究者になろうと思っていたわけではなく、元々実務家として働くことを目指していましたが、実際そうでした。大学卒業後は、日本で就職し、長く務めるつもりはありませんでしたが、結果として7年くらい金融機関に勤務しました。その後、米国大学院で難民や人道支援を体系的に学びました。その後、自分が目指していた実務家として NGO と国連開発計画（UNDP）に勤務をしました。

難民研究に関心を持ったのは、特に NGO で働いている時に、南アフリカやモザンビークなどで難民向けのマイクロファイナンスのプログラムを運用していた時のことです。その時に、難民の方々の経済活動の構築プロセスに関心を持ちました。その後、国連機関でも働いていましたが、プログラムの運営よりも調査に携わりたいと考え、組織の中で調査をするためにはどうしても博士号が必要だったので、ロンドン大学の博士課程に進みました。ロンドン大学で Ph.d をやっている時に、西アフリカにおけるリベリア難民のキャンプ内での経済活動を1年間調査しました。その後、オックスフォード大学の国際開発学部難民研究センターというところに来て、11年くらいここにおります。

今の職場では、調査と学生への指導を行っています。学生の指導の比率が高いですが、調査に関しては、2012年からは Refugee Economies、難民経済を主たる調査として行っています。場所は東アフリカが中心で、ウガンダ、ケニア、エチオピアです。難民キャンプで暮らす難民と首都に在住している難民の人たちの経済活動を調査しています。また、周辺のホストコミュニティの調査も併せて行っています。比較的規模の大きなプロジェクトです。今は、第一フェーズが終わり、第二フェーズとして去年からとりわけ難民の国境移動についての調査を行っています。この中でとりわけ、ウガンダ、南スーダン、コンゴ民主共和国、ルワンダの国の人たちの亡命国と自国の移動に関して調査を始めている段階です。

苦労したことや課題は、学術調査が直接政策や実務に影響を与えることが少ないという点だだと思います。逆に有意義に感じたことでいうと、学術調査が政策に影響を与えた成果があったことだと思います。

山田 私は学部と修士を通じて、イタリアの難民について研究をしていました。関心を持ったきっかけは、高校生の時の交換留学で、アジア人の自分にすごく良くしてくれていたイタリアの同級生たちが、道で物を売っているアフリカ系の黒人の人たちに対してすごく冷たかったことです。そのギャップに対する違和感がずっとあって、それについて考えたいと思ったのが研究を始めたきっかけです。日本の大学に進学し、3年次に卒業論文のテーマとして難民を選びました。その中でイタリアに3年生の時から1年間留学し、初めての調査を経験しました。今振り返ってみると、社会調査の手法にきちんと基づいたものではなく、人類学的な厚い記述をしてきたわけでもなく、本当に至らない調査でしたが。

イタリアに行って、中々きっかけがつかめなかったのですが、指導教員に背中を押されて、一番難民の 이슈があるところに行こうと決め、初めての調査でランペドゥーサ島に行きました。イタリアの最南端の島で、リゾート地としても有名な人口6千人くらいの小さな島です。小さな町に連日、船に

乗って難民が訪れ、話題になっていました。しかし、現地で島民に街頭インタビューのようなかたちで話を聞いてみると、今まで報道や文献を通じて、自分が持っていたイメージとは全く違う様子が見て取れました。

その後、留学先のヴェネツィア大学近郊で、難民受け入れ施設を運営している民間団体でボランティア活動をしました。短い期間でしたが、いくつかの施設を訪問していく中で、同じ団体が運営しているのに施設ごとに、受けられる支援の内容や実際に生活していく環境が違いました。どの施設に割り当てられるかによって、難民の生活が全然違うことに問題意識を持ちました。

その問題意識を持って、イタリアの修士課程に進学し、約9か月間、難民受け入れをしている施設でボランティアをしながら参与観察していました。私の調査対象者は職員の人たちでした。実際に働いている職員が難民とどのような関係を構築しているのかということに着目していました。

実際に調査をしていて、苦労したことや悩んだことは「どうしてこの調査を自分がするのか」ということです。難民の人たちと会い、話を聞くことは私にとっては貴重な経験ですし、学位を取得するためのデータを集めるという意味もあります。一方で、その人たちにとっては私と出会うことで、どういった意味があるのか、その人たちに何ができるのかということに悩んでいました。自分のためだけの調査なのではないかとずっと思っていました。なので、なんとかボランティアを通じて、そこのところのバランスを取ろう、少しでも何かできないかと思い、活動していました。

研究一般の面白さかもしれませんが、難民研究をやっていてやりがいや良かったと思うことは、研究の過程を通じて自分の中の偏見に気付かされたことです。そういう時に、学問として難民研究をして良かったと思った記憶があります。

「面白さ」という言葉

松本 ディスカッションに入る前に、参加者の方からいただいたコメントを紹介したいと思います。今回のシンポジウムのタイトルの「難民研究の面白さと難しさ」や、自己紹介でパネリストの皆さんがタイトルに合わせて「面白かったことは～」と発言をされましたが、『面白い』という言葉の使い方が適切ではないのでは」というご意見でした。つまり、難民の人がおかれている状況を考えれば、研究が「面白い」と表現することに違和感があるということだと思います。これは、非常に重要なことだと私は思っています。研究者が当たり前に使っている言葉に「我々」と「難民の人たち」との距離の持ち方や、向き合い方が表れるのではないのでしょうか。ご指摘いただいて大変ありがとうございます。

この「面白い」という言葉は色々なものを捨象し、ある世界の決まった枠組みの中で物事の価値を判断してしまう、非常に危うい言葉だと思います。そのあたりを気にしながら言葉を使っていきたいと考えています。

難民研究者と学生とのギャップ：難民問題をどう伝えるのか

松本 私は学部を中心に教えていますが、私が所属している国際文化学部は英語で言うと Intercultural

Communication なんです。つまり、「文化的障壁を乗り越えて、お互いを理解していく」ということを勉強したいと思って大学に入った学生たちを相手に授業をしているわけです。私は「国際文化協力」という授業の中で、難民に関わる授業を 14 回のうち 3 回くらい入れています。毎年驚くのは「なぜ、日本は難民を受け入れなければならないのか。日本にはそんな文化、土壌はない」「我々の仕事を失う」「治安が悪くなる」というコメントをする人が非常に多いことです。そのことに、毎年、私は非常に心が痛む思いでいます。「なぜ難民を受け入れないといけないのか」と言っている学生たちが多くの中で、教員として難民をめぐる制度や法律、国際条約の話をするもののギャップですね。教えていて、そのギャップに苦しむことがあります。

小俣さん、片さん、植村さんは大学で教えていて、かつ難民研究をされていますが、その中で感じられるギャップやそれを乗り越えるためになさっていることはありますか？

片 私は 2019 年から大学生向けに授業をしていて、4 年目になります。特に、学部生向けの教養科目として難民の授業をしてきたんですけど、15 回分の授業を教えた後でも、「結局、難民を受け入れることは治安も悪くなるし、経済的にも負担がかかって税金の無駄使い」というコメントをたくさんの学生からももらいます。私もすごく胸が痛くなってきます。大学生からこのようなコメントを受けることもすごく悲しいですし、誤った情報を大学生たちが持っていると思っています。私は、外国人として日本で働いていますが、時々、「先生も税金を払っているのですか」と聞かれるほど、外国人は税金や年金を払っていないと考える学生が結構います。

学生の多くは難民を支援される存在としてのみ考えているのだと思います。合法的に難民として認定された後に経済活動をしたら、当然のことながら所得税は払いますし、住民としてどこかに暮らしているのであれば住民税も払います。このような常識のようなことを多くの学生は知りません。よく「国民の税金」という表現が使われていると思いますが、当たり前のように使っているせいか、税金は「国民」だけが払っているもので、外国人は払っていないと勘違いしているようでした。私はいつも授業の中で「国民の税金」という表現がいかに間違った考えを生み出すのかを伝えています。このような大学生たちの考え方を改めるためには、教育者として今回のシンポジウムのように、意見を交わす場で、教育をする必要があるのではないかと考えています。義務教育から自分の暮らしている国の制度を伝えていくことが重要ではないかと思っています。

植村 私も 4 年間、学部生に教えており、最後の 2、3 回の授業で難民問題に焦点を絞って情報を学部生に伝えています。びっくりする意見はそこまでなく、ギャップを感じることはあまりないです。おそらくそれは、講義の構成として、まず国家体制を相対化するところから始めるからだと思います。世界の国は主権国家体制であっても相対的であることや、国家の枠組みに縛られない個人個人に対する暴力の話を通じた講義を通じて教えています。そのため、「[難民は] 国際社会で保護する対象である」というのがすんなり伝わっているのではないかと思います。事象の背後にある政治制度など異なる見方を提供すると、学生も受け入れるのではないかと思います。

松本 お二人の話を聞いて、前提をどう伝えるかが鍵なのではないかと思いました。すぐに難民研究という核心にジャンプするのではなく、前提を共有してから核心に移るのが大事なのではないかと思います。

小俣 私が教えているのは大学院生か博士課程であり、難民の問題に特化した学生であるため、片さんや松本さんがおっしゃったような素朴な質問や疑問はあまり出てこないです。ただ、国連機関や各国政府など、政策関係者とのやりとりの中ではバイアスのかかった意見を持っている人が結構います。例えば、トランプ政権はまさにそれを体現していたと思います。ですが、実証研究を使えば「難民の人たちが雇用を奪う」という主張（難民に関するバイアスや偏見）には反証ができます。これは学術研究者の大事な仕事です。教育者としては、（指導する学生の中には）学術の世界を目指す人が比率的に多いため、研究倫理の問題を考えています。先ほども出ていた「面白い」ということに対する違和感が私もあり、それだけでは調査が正当化されないことを学生には伝えています。

松本 パネリスト中で一番学生に近い立場である山田さんは、難民研究に対して学生が感じる視点はありますか。

山田 自分が学生の頃に、どこまで難民について正確な情報を持っていたか振り返ると、必ずしも十分ではなかったと思います。前提として「難民は助けるべきだ」という強い思いが私の中に最初にあったので、正直に言えば「難民を受け入れると雇用がどうなるか」とか、そのようなことにあまり関心を持っていなかったです。つまり、私も小俣さんがおっしゃったような、難民が経済に与える影響などについて学術的なデータをきちんと持ったうえで難民問題に向き合っていたわけではありませんでした。

学部、修士の時は、周囲の友人も私と同じような考えを持っている人が多かったのですが、良くも悪くも難民受け入れに賛成している人もデータをもっているわけではないと思います。振り返ると、「人道的に大事だから」というだけで考えていた部分がありました。むしろ、難民が受け入れ社会に経済的に貢献するというデータを読んだ時に驚いた覚えがあります。そういう意味では、（難民受け入れに肯定的な学生だった）自分も難民に対して偏見を持っていたといえ、持っていたと思います。

難民問題への「関心」から「研究」へのブリッジ：どのような調査・研究ができるか

松本 難民研究に足を踏み入れると、データを集めて、政策的にも反証していくなどの役割までもが、研究の中に入ってきます。ここで、難民に関心を持った人と研究までの間のブリッジについて話を移したいと思います。難民に関心がある学生はたくさんいますが、学生たちが実際に研究をするのはハードルが高いように思います。学生が支援団体に行って、難民の話を聞いてすぐに卒論にできるかということそうではないですね。研究倫理の問題もありますし、難民に何気なく発した言葉が相手を傷つけることもある。しかし、大学の組織の課題もあって、教員がそれをしっかり見られるわけではない。こうした中で、ある意味、純粋な気持ちから関心を持った人が、研究というものに行きつくことが難しいのではないのでしょうか。この間のブリッジについて、どうすればいいのか、あるいはどういうことをしてはいけないのかなど、皆さんのご経験やご意見を伺えますか。

山田 質問のご回答になっているかわかりませんが、私はまさに難民支援協会が事務局を務める難民研究フォーラムで働いているので、難民の方に対する調査にはかなりセンシティブになっています。実際に実務として難民支援に関わる中で、調査・研究を行う際の倫理面の問題は大きいと感じています。

振り返ってみると、自分が学部でも修士でも、直接難民の方の語りをもとに再構築する、分析するという手法をとらなかったのは、倫理の問題と正面から向き合って出した結論ということではないんですが、やっぱりある種「自分のため」である研究のために、学部や修士の段階で、その人たちの語りを赤裸々に聞くことにすごく居心地の悪さがあったからだと思います。

学部生の時に難民支援団体にボランティアで行った時に、「ちょうど支援のために難民の方の話を聞き取るから同席していいよ」と言われて、気軽に同席したことがあります。ただ、その方の話が、出身国で家族が殺されて、自分もレイプ被害にあって、という話で。その話を聞く時に私が同席してしまいました。それは同席させた支援者の経験不足とかの問題もあると思うんですけど、すごく居心地が悪かったです。「この話を私は何のために聞くのか」という感覚がずっとありました。

自分の研究の中で、職員を対象にしたり、島の人から話を聞くことを選んだ理由の一つに、この時に感じた居心地の悪さがあるかなと思っています。そういった感覚を含めた上で向き合えば、倫理的な面の課題を緩和した調査が学生であっても可能なかなと思います。

松本 私の最近のゼミ生で、牛久の収容所 に話を聞きに行った時に、まったく同じことを言った学生がいました。支援者と一緒に行ったが、難民の方の話の重さとその人に対して私は何ができるんだろうと考えた瞬間に2回目が行けなくなったので別の方法で調査をしたという学生もいます。

片 さっき自己紹介でもお話ししたように、私は難民を研究したいというのが始めではなくて、まずチベットに関心があり、韓国内のチベット人コミュニティとの関わりがスタート時点でした。難民といっても、皆バックグラウンドも違いますし、考え方も違います。チベット難民の場合は、積極的に自分の話を他の国々の人に伝えて欲しいという気持ちがとても強い人々で、私が聞かなくてもどんどん話をしてくれるという、研究者としてはすごくありがたいこともあります。かれらは自分の声が世界に発信されていくことに嬉しさを感じていました。私は、そういうことから始まってしまったので、むしろセンシティブに考えなくなってしまったという逆のパターンでもあります。私の場合は、関心から研究に行くブリッジは、むしろ、なんと言いますか、私はチベットの友人たちに「もっと調査をして本に書け」と後押しされ、使命のように感じてしまったというの也有ります。私はかれらが語ってくれる物語をちゃんと聞いて、それを他の国の人々に伝えていかなければならない、と学部を卒業して、留学をしようと決めた時に考えました。

松本 もっとこのことを伝えてくれと思っている人がいるというのは、なるほどと思いました。逆に、それにエンカレッジされて、それを望んではない人のところへ行ってしまうというこのギャップみたいな、あるいは、すれ違いみたいなものが大きな問題になるのかなと思います。

小俣 今、おっしゃられた通り、難民の方たちの中には、「自分のストーリーを聞いてくれ」という人もいます。同時に、逆側のケースで、英語で言うと Over Research され、調査されすぎている難民の人たちも結構いらっしゃいます。そういうところの人たちは、うんざりしている難民たちもいらっしゃるのが現実です。私は、先ほど研究倫理の話に触れましたが、自分がそれを満足にできているということではなくて、私自身もやっていて大きな課題だなと思っています。リサーチが行き届かない人は「もっと話したい」と思っているんじゃないでしょうか、逆に、ある一部の地域では研究者や学生がこぞって調査に行っていることもあり、二極化が起きています。これは重要な問題だと思います。

質問に対する直接の回答にはなりませんが、学部生、大学院生は現地調査に行かなくても学位を取るための論文を書く方法はたくさんあります。現地の一次調査を取れないからといって、学術研究者の道を諦める必要はないと思っています。

松本 一方で、研究者を目指す人であれば、まずはいろんな研究を経験するということに納得してくれるかもしれませんが、学生の中には、学術研究の道に進むのではなく、難民に共感を持って卒業論文に書きたいと考えている人が人数としては圧倒的に多いと思います。しかし、直接難民の方から話を聞けないとなると研究をやめてしまう人もいます。

小俣 もし、僕の目の前にそういう学生がいて、僕が指導教官であった場合、一つ具体的な解決法としては、既に一次調査をやっている方は世界中にたくさんいらっしゃるわけなので、当然それを使うという方法、ケーススタディはあると思います。我々のところでは、倫理や時間の問題などの理由から（修士課程の）大学院生に一次調査はさせていません。すでに他の人がやってくれた事例を使って声を拾い上げることもできます。今の時代は、サンプルの問題はありますが、インターネット、ブログなどのソースも出ています。そういうことを使うこともできますし、個人の話を聞くのが難しいのであれば、日本は分からないですが、難民が自分たちで作っている団体等であれば話を聞きやすいのではないかと思います。

松本 （小俣さんが所属する）オックスフォードで難民研究を中心にを行っているセンターですら、一次情報を取ることに對して批判的であることは、日本で難民研究をしている人はよく知らないと思います。「一次情報を取らなければ研究とは言われないのではないか」と思い込んでいる人もいると思うので、今の小俣さんのお話はそういう人に光が差すというか、別の見方を提供できると思います。

植村さんは、これまで制度、政策に特化された研究をされていますよね。そういう制度や政策を研究されている方にとって、語弊がある言い方かも知れませんが「現場のリアリティ」、つまりこれまで話してきたような研究倫理が介在する人と人が接触することと、政策・制度研究をどのように整合性をつけていращやるのでしょうか。

植村 私は難民研究に対して、政治学や国際関係論の視点から分析をしています。私の所属学会などでは、一次調査はメインの手法ではありません。直接インタビューするなら政策形成担当者、例えば EU 機関の部局委員です。難民の方に直接インタビューをするという手法は一般的ではありません。なので、難民の話を聞いて生の声を掘り起こすという手法と、政策・制度研究の中で私の所属している領域とは乖離があると感じています。

一方、難民問題に関心はあってもインタビュー調査に踏み出せない人たちには、少し踏み出しやすい領域であると思います。特に、EU と加盟国との関係については、EU レベルで作られた政策が実際に各加盟国でどのように受容され、実施されているのか体系的にまとまっていません。NGO の文書などを用いて各国の運用について分析したり、また、欧州人権裁判所の判例などを見ることによって、中長期的に多様なアクターを含みながら分析を進められます。それ自体にも意義があると思います。さらに、難民の人の意見を実際に聞くことと政策・制度分析を架橋し、2つの領域をつなぎ合わせながら、問題に対してアタックできることは重要ではないでしょうか。

難民研究の「学際性」とはなにか

松本 難民研究は学問分野の違いを超えて互いに理解し合い、影響し合い、相乗効果を持たせるかということ言えば、今までしてきた議論を一緒にしていくことが重要で、そこが課題でもあると思います。難民研究で、さまざまな学問分野を融合するといっても、実際は学問分野で区切られるわけです。それぞれがどのようにお互いをどのように繋げ合うかが大事だと思いますが、皆さんが考えていることについて伺いたいです。

小俣 融合の方法は2つあると思います。1つはいわゆる学際的な研究と言われる学術分野、もう1つはメソドロジー（調査方法論）の融合です。我々の学部（難民研究センター）のプログラムでは学際的な研究がどちらかというとメインです。私は、質的なデータも取りますが、逆に数字もたくさん取ります。私の分野は難民の経済活動であるため、数字の裏付けが必要な時も多いので、自然にどちらの方法もやっています。メソドロジーに関しては、データの取り方は日進月歩ですので、他の学術研究者のデータの取り方には常に目を光らせています。我々のところ（オックスフォード大学）では、むしろそういうやり方がトレンドになっています。

片 難民研究は人を研究するため、学際的にならざるを得ない研究領域だと思います。私のメインは文化人類学ですので、現地調査は必須です。長期間の参与観察を経て集めた、かれらの語りや行動を分析するためには、結局のところ、文化人類学の理論も必要ですが、歴史学、政治学も非常に重要です。ただ参与観察をして、「かれらが今、こういうことをされていますよ」というデータを提示するだけでなく、パスポートの歴史であったり、国境の意味の変遷であったりを把握したうえで、現在の難民の移動を見た方が、より総合的に見えます。やはり、難民研究はもちろんながら学際的にならざるを得ない研究領域だと思っています。

松本 一方で、一人の中で学際難しいわけです。しかし、何人かで集まって、その人が自分の学問分野に閉じこもらずに、相手の学問分野も尊重しながら、新しいものを生み出していけるか、という学際をやろうとすると大変なことだと思います。でも、先ほどの小俣さんのお話を聞くと、オックスフォードでは比較的そのような環境があるということなのかなと理解しています。

小俣 一点補足しますと、私はチームでやっていますが常に揉めたりしています。みんなが納得することではなくて、かれらの理論を理解するためには、相手のやっている方法にも精通する必要があります。その努力がお互いに求められます。

植村 融合することの大事さは私も感じますが、これまでに融合することの難しさを感じる局面が何度もありました。例えば、私の所属している EU 学会では、政治分野と法律分野の部会があって、同じ難民問題を扱ったとしても、かなり架橋するのが難しい話になっています。法律分野ではどんどん話が掘り下げられて専門的になっています。例えば、EU レベルの政策がフランスでこういう風を実施されて、人権侵害を生み出しているというような事例研究があったとしても、その事例が実際のフランスの政治

や国政選挙にどのように影響を与えているのか全く見えない状況が続いています。もちろん、乗り越えなければいけないと提言はしていますが、一つの学会であっても領域ごとの架橋が難しいと感じます。その理由の一つは、メソドロジーだと思います。それぞれのメソドロジーをどうやって繋げるのかという努力が、日本の中ではあまりなされてこなかったという印象があります。

松本 そういう意味では、色々な専門分野の人が集まって侃々諤々の議論する場を作るという役割を担っているのが難民研究フォーラムではないかと思います。

山田 まさしくそれをやりたいと思っているところです。難民研究フォーラムは、初期の日本の難民研究が法学的な研究に偏っていたことに問題意識を感じて設立されました。法的な視点も大切ですが、それだけにとどまらない議論を喚起したいと考えています。例えば、条約の定義に限らずに広く難民をとらえて議論してみたり、フォーラムとして様々な人が集って話せるような場を持てればと思っています。

難民に会わず難民研究を行えるのか

松本 ここからは、参加者から寄せられた質問・コメントをもとに質問させていただきます。「難民の人に直接会わないで調査する方法はありますか?」。この点について、もう一度皆様から伺いたいと思います。

植村 例えば、NGO や国際機関、EU などの政策提言を理解して、しっかりまとめなおすことが必要な作業だと思います。しかし、それだけではその地域の研究者の追っかけになってしまい、意味がありません。そこで大事だと思うのは、研究者目線になってしまいましたが、方法論に対するこだわりです。例えば、中長期的に見る、包括性を意識して分析対象を選定するなどメソドロジーにこだわっていくと、別の見方が出てくるのではないのでしょうか。

山田 先ほどの学生が一次調査ができないと研究自体を諦めてしまうという話を聞いて、それでも研究を続けられるかは、一次調査以外の研究にどのような意義があるのかが見えているかが重要なのだと思いました。今思うと、修士課程で(自分の対象を選ぶために)一次調査がされていない内容を探す中で、植村さんがおっしゃったように、制度の変遷などが論文にまとまっていないことがたくさんありました。そのことをまとめるのも十分にいいものが書けたのではないかと思います。私の場合は、そのステップを飛ばして、一次調査になってしまいましたが、前段階で議論をまとめることは、一次調査をする人にも重要になっているので意義があると思います。

片 今の話を聞いていて、自分はどのような問いに答えたいのか、難民を研究することによって何を知りたいのかがはっきりしていれば、それが難民に直接話を聞くなり、NGO の方々に調査をするなり、入管の職員に調査するなり、調査方法は様々であると思います。自分が難民を研究することでなにを知りたいのかがわかっているならば、直接難民の話を聞いても聞かなくても研究はできると思います。

松本 私も研究をする者として全くそうだと思います。一方、研究者を志していない学生からすると、やっぱり「話を聞いてそれが卒論になったらいいな」という思いでいる。学生を目の当たりにするとそういうことなんですね。「そんな奴は研究なんかしないでもいい、卒論を書くな」と言ってしまうのも手だけれど、それではどんどんこの分野の裾野が狭まって、若い人たちがそういうことに関心を失って、何も目を向けずに卒業してしまう。最初の話にも関連して、「それを放置していいのだろうか」ということになるので、なんとかこちらにも努力をしないといけないと思います。ごめんなさい。難民研究というよりは難民教育というのかわかりませんが、ちょっと分野が変わってしまいました。

研究資金を得るための「面白さ」を追求していないか？

松本 実務的なご質問もたくさんいただいています。「博士課程まで行ったら生活費はどうするのですか？」とお問合せをいただいています。これは、博士まで行くのならどんな分野でも同じといえば同じなんですけれども、もし、ご助言をいただける方はいらっしゃいますか。

片 助言というほどではないですが、私も調査する時にはお金に困っていました。奨学金や助成金は一生懸命にもらっていましたが、十分ではありませんでした。逆に、インドのチベット難民から「ピョンさんは貧乏だから」と言われるほどでした。とにかく助成金に申請するほかないのではと思います。

松本 参加者から鋭い指摘がありました。「だからこそ面白いという言葉に飛びつくのではないかと。つまり、「面白い」研究で科研費が取れるとか、要するに難民の人たちにとってどうかではなくて、そもそも研究として「面白い」かどうかということに走ってしまう。お金がなかなか取れないことがそちらに我々を仕向けてしまうのではないかと、というご意見かなと思うのですが、そのあたりについてはどうでしょうか。どのように自分をコントロールすればよいのでしょうか。

片 私は研究が進む中で、チベット難民、自分、審査員の関心事が全て溶け込んでいる申請書の作成を試みていました。これを完全にお金を獲得するために、今流行しているものだけを追及することは、さすがに難民研究としてできません。ただ、それも完全に無視はできないので、私の関心事、難民たちの関心事を入れ込んだ申請書を書こうと自分自身は試みています。落ちた経験ももちろんあるので、その時はたぶん審査員たちの関心事に沿っていなかったなと反省しつつ、またもっとよい申請書を書こうと思っています。答えになっていなくて、すみません。

松本 やはり自覚的になる必要があるということですね。科研費に通るための方法というのは様々なアドバイスもあります。でも、取ったら取ったでそれ（自分や難民の関心ではなく、お金を取るために書いた部分）は心からそう思っているわけではなくて、ちゃんとその部分は割り切って、別々に考えるということなのかなと、伺っていて思いました。お金のことについて、もし他にもあればいかがですか。

小俣 危険なトレンドとして、お金がつきやすいプロジェクトに集中するというものがあります。近年、その傾向が強まってきていて、大変危険な兆候です。ただ、この問題に関していうと、今日のテーマを

超えてしまうのですが、学術研究者の評価方法も変化していて、特にヨーロッパではお金を獲得できる能力も評価の重要な対象です。そのため、当然、お金が取れそうなプロジェクトをやるという傾向になっています。先週、ドイツである審査をやっていたのですが、今はウクライナなどの一番タイムリーな話題に調査が集中するというトレンドがどうしてもでてきています。数年前はこれがシリアだったりして、特に、Regional な関心事が反映されていると感じます。これに対して、どうすればよいのか僕は回答がないのですが、大変危険なことが起きているように感じます。

難民研究者としての柱

松本 研究者の方から質問をいただいたのですが、お金の問題など様々な状況がある中で難民の研究をしていくにあたって、自分が何に大きな軸を持つか。例えば、「研究者は社会に対して責任を持っている」とか、あるいは、「難民の研究というのは、難民の人や Asylum Seekers の人のためになることが原則である」とか、この分野で研究をする上でこれだけは譲らないで柱にしている、大事にしていることはありますか。

山田 私は今は研究をしていないですが、難民研究フォーラムとして日々、色々な方の難民研究を読ませていただく中で、「For Refugee」を大切にしています。そこはどのようなアプローチ、手法で研究するにしても同じで、その研究の奥に実際にいる難民の人たちを意識した論文になっていてほしいと思っています。そこが見えているかが重要だと思います。

松本 「一次調査をやりたい場合どんな方法が有り得るか」という質問もありました。それでもどうしても難民の人から直接話を聞きたいという場合に、研究倫理の問題もありますが、こういうやり方を考えた方がいいのではないかとご意見はありますか。

小俣 単刀直入に今の質問にお答えするのは難しいのです。というのも、その方がどういう方を対象としているかによって、変わってくると思います。今の質問が大学生、大学院生だとすると、単に「面白い」以上の意義があるかどうかは大事なボトムラインとしてあります。妥協案ですが、例えば、難民への支援プログラムを行う団体に対して、インパクトの調査を学術的に正しい方法で行うのはどうでしょうか。これは博士課程の学生には勧められないですが、学部生、修士課程の学生はこのような手法もできるのではないかと思います。支援している団体を通すことで、少なくとも自分の調査にフィルターをかけることができると思いますし、難民とのコンタクトも比較的つけやすいのではないかと思います。

松本 おそらく本日も参加されている支援している団体からすると、学生から頼ってこられた場合の難しさがきつとあると思います。支援団体としても、一次調査に対して前向きに考えたいが難しいということもあるかと思いました。

難民研究だからこそ見えるもの

松本 社会の中で他にも多くの関心事がありますが、難民研究という括りの中で考えることによって、だからこそ見えてくるもの、社会に対して問えるもの、考えること・感じるができることはありますか。ご経験の中からお答えいただけますか。

山田 難民という人を考えるにあたって、避けて通れない国籍、国籍ってなんだろう、どうして自分の国にいられない人が、この国に滞在するのにこんなに複雑な手続きなんだろうということを考えることになります。難民について考えると、どうしても「日本人として日本に暮らしている」、「イタリアでビザをとって留学した」という自分の経験の範囲を超えた人の経験を考える必要があります。制度や仕組みの壁があることはわかっていたつもりでも、実際にその人たちを目の前にしたり、論文を読むと、自分の偏見に気づいたり、ずっと向き合い続けることにやりがいや意義を感じます。

植村 私は移民研究から入り、対象が広がって難民研究に入ってしまったという手順になります。その中で、移民の中でも家族再結合、つまり、先に男の人が行って、それから家族がついて来るという時に、家族が国境を越えられなかったり、国内にいてもビザが下りなかったり、非正規滞在のかたちになって本国に送還されてしまうという難民問題と類似する問題が起きることがあります。研究を進めていくと、制度的な欠陥によって被害を受ける人がいるという状況を改善しないといけないという点を日々感じています。まず、問題を発見し、改善策を考えていけるのが研究を進めるうえで、強いモチベーションになっていると思います。

松本 制度の害を直接受けている人たちの存在とその制度の研究は非常に意義があるというのは、なるほど、と思います。

片 私は外国人として海外で暮らしています。例えば、大阪大学を卒業した後、職にすぐに就けなかった時に、すぐに「じゃあ、ビザを取り消します」という状況になってしまったことがあります。日本に10年暮しているにも関わらず、何かしらの所属機関がないと日本にいられないという経験をしました。外国人として生きている中で、また、難民研究を進める中で、自分の生活が見えてきました。もちろん、難民とは比べられないほど安定していますが、自分の経験と照らし合わせながら、チベット難民のことを研究しています。国籍や在留資格とは何か、外国にただ滞在するだけでなぜ複雑な書類や費用がかかるのかという問題を、常に私も経験しながら研究をしています。

もう一点、文化人類学者なので、私の関わる難民とは調査対象というよりも、友人や家族のような関係です。本当に自分はこれまでかれらにとっても助けられました。最終的に研究成果になり、自分の就職先も決まったということになりました。今まで、チベット難民に関わったことで、自分の視野や価値観が大きく変わってきています。難民研究だからこそ感じてきたことだと思います。

松本 今、片さんの話を聞いて私は反省しました。実は、どうして韓国人である片さんが日本でチベット難民の研究をしているのか、本当は理由を伺いたいと思っていました。しかし、それはむしろそのような背景を持つ片さんだからこそ、片さんの研究に意味があり、我々も学ぶことがあると思います。す

ごく目を開かされました。日本国籍ではない人たちが日本で別の国の研究をすることは私たちにとって、非常に学びが多いのだなと反省しながら聞いていました。

その意味では、小俣さんは日本人でイギリスに行って、東アフリカの研究をしているということになるわけですが、難民研究だからこそ見える意義についてはいかがですか。

小俣 松本さんがおっしゃられた通り、私も海外で暮らす人間です。話が広くなってしまうかもしれませんが、世の中、国際的に見て不寛容な時代になっていると思います。その中で、その中で特に外国人だとか、もっと具体的にいうと難民のように自分に責任はないが不幸や災難にあって本来受けられるプロテクションから外された人たちに厳しい目を向けられている傾向があると思います。話が飛びますが、例えば、数年前にあったブラックライブズマターやアジア人へのヘイトクライムなどがあった時に、私にとっては他人事ではないんですね。難民や Asylum Seeker に与えられるプロテクションをないがしろにしていたときに、我々は将来どんな目にあうのかというのが、今、私が怖いと感じていることです。このことを私は難民を通じていつも考えてしまいます。

もう一つ研究の具体的な話に戻りますと、学術研究が政策に与える影響は少ないですが、それだけで終わらないようにしたいと思っています。最近では、例えば、日本語で学術研究ではないノンフィクションを書いたり、新聞や本などの人が目につきやすいメディアでとっつき易いものを書いたりしています。それらによって、難民の人たちへの理解を深めるなど、具体的な方法もできるだけやるようにしています。

おわりに：難民研究者が伝えていくこと

松本 パネルディスカッションを通じて、難民について伝える際に、最初に説明する手順が大事であると分かりました。そして話を聞いて学生が関心を持っても、難民の人に直接話を聞くことは難しい部分が多いですが、様々な方法で研究を進められると教えていただきました。研究をさらに積み重ねて行った時には、より大きな社会のあり方や政策制度と人々の生き死のつながりを感じることができると思います。そのように感じるからこそ、我々は、より分かりやすい言葉でメディアを通じて、あるいは、人々に語りかけるようにならなければなりません。難民研究というものが、難民の制度について理解してほしい、それをしてもらうために、税金の仕組みから、主権国家の仕組みからというところから入って、最後にもう一度そういう人たちに語りかける言葉を探していく。そういう意味で、難民研究には非常に意義があると皆さんのお話を聞いていて感じました。

以上

※登壇者のプロフィールは以下よりご覧いただけます。

<https://refugeestudies.jp/2022/08/sympo220927/>